

むかし、ある山里に、おばあさんが住んでいました。

ある日のこと、庭さきに、腰のおれたすずめが落ちてきて、ちゅんちゅん鳴いていました。おばあさんは、かわいそうに思っすずめをかごの中に入れ、えさをやってかうことにしました。

かわいがって世話をしているうちに、すずめは腰もなおって、かごの中をとびまわるよふになりました。ある日、ふとしたひょうしにかごのふたが開いて、すずめはどこかへとんでいっすまいました。おばあさんは、あちこちさがしましたが、どうしても見つかりませんでした。

つぎの日、軒さきにすずめがとんできて、まどの外できれいな声で鳴きました。おばあさんが戸を開けてみると、庭いちめん、ひょうたんの種がちらばっていました。おばあさんは、その種をぜんぶひろいあつめて、裏の畑にまきました。すると、きれいな芽が出て花がさき、実がなって、大きなひょうたんがたくさんとれました。おばあさんは、よるこんで、ひょうたんをみんな軒さきの日当たりのよいところにつるしておきました。

十日ほどたつと、ひとつのひょうたんから、まっ白いお米がぼろり、ぼろりと落ちてきました。ひとつづ拾って食べてみると、とてもおいしいお米でした。そこで、ひょうたんをぜんぶ下ろしてみたところが、どれにもこれにも、まっ白いお米がいっぱい入っていました。おばあさんは、よるこんで、そのお米でごはんをたいて重箱につめ、近所の人たちに配つてあるきました。おいしいごはんだつたので、みな大よろこびしました。

ひょうたんのお米は、いくら出しても少しもへらなかつたので、おばあさんは、たいそうなお金持ちになりました。

さて、おばあさんのうちのとなりに、欲ばりばあさんが住んでいました。欲ばりばあさんは、すずめの話を聞いてうらやましがって、すずめをとりわざわざ山へでかけていきました。そして、一羽のすずめをつかまえると、腰をおって、かごに放りこみました。いっこうにえさをやらないので、すずめは苦しがつてばたばたとびまわりました。ばあさんは、すぐにかごのふたを開けました。すずめは、どこかへとんでいっすまいました。

つぎの日、ばあさんが、

(すずめのやつ、どんなお土産みやげを持ってくるかなあ) と思いながら待っていると、すずめがとんできてまどの外で鳴きました。戸を開けると、庭いちめん、ひょうたんの種がちらばっていました。ばあさんは、おおよろこびで、種をぜんぶ裏の畑にまきました。すると、やつぱり、芽が出て花がさいて実がなって、たくさんのひょうたんができました。

欲ばりばあさんは、ひょうたんをみんな軒さきにつるして、

(米早くできよ。米早くできよ) と思って、毎日ながめていました。けれども、いつまでたっても、お米はこぼれ落ちてきません。ばあさんは、はらを立てて、ひょうたんをぜんぶ引っぱりおろし、ひとつひとつうちこわしました。すると中から、へびやら、むかでやら、はちやらが、うようよ出てきて、ばあさんをかんだりさしたりしました。欲ばりばあさんはどうとう死んでしまいましたとさ。

おしまい。

原話：『全国昔話資料集成II 福岡昔話集』福岡県教育会編
再話：村上郁